Book Review

やさしくわかる
歯と口腔のビジュアルガイド

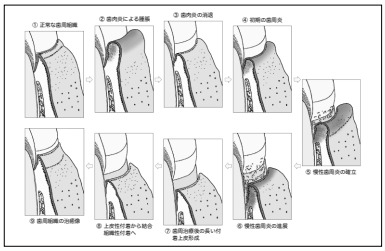
井出吉信　監修
阿部伸一・小林明子・村上恵子　編

AB 判，192 頁，
カラー
定価（本体 5,500 円+税）
医歯薬出版刊

Reviewer
牧野　明　Akira Makino
（富山県・まきの歯科医院）

歯科臨床を行ううえで，口腔内や歯や歯周組織の構造を熟知していなければならないことは当然である．だから私たち歯科医師，歯科衛生士は，そのために十分な教育を受けてきたはずである．解剖学，組織学，病理学，放射線学 etc…

しかし，過去に勉強したはずのそれら基礎の知識と，臨床の現場で目にする患者さんの「歯や口腔」が，本当に具体的に結びついて十分に理解しながら臨床が行われているだろうか．筆者を含めそれが怪しげになることがあるのが本当のところ，なのかもしれない．



本書 98 頁，図 13「炎症に伴う歯周炎の進行と歯周治療後の治癒過程」より．歯周治療によって獲得された長い上皮付着は結合織性付着へと変化する（長い上皮付着は不安定な治癒像ではない）

歯科臨床を行っていくなかで，初めて疑問に思うことがある．臨床とは少し離れたものと思えていた基礎の知識がここで活かされるのだと気づく場面がある．基礎の知識を基に確認したいときがある．それら日常の小さな疑問にわかりやすい図や実際の写真を用いて，平易な解説でやさしく応えてくれるのが本書である．

本書は CHAPTER1〜4 で構成されている．

CHAPTER1：肉眼で見る解剖学から顕微鏡所見としての組織学，そして実際の症例写真や図解で，まずは正常像とその働きを解説している．

CHAPTER2：CHAPTER1 で理解した正常像は変化する．変化を見つけることやそのわけを知ることの意義は大きい．歯の変化，口腔粘膜の変化，歯周組織の変化，歯の硬組織や歯髄の変化，齲蝕による歯の変化，唾液線の変化，粘膜の変化 etc．それらがどう変化するのか，その理由を知ることで，経過観察のなかでどこをどう注目したらいいのか眼を肥やすことになる．自分の行った治療で歯周病がコントロールできる理由を知ることは，自分が行っていることへの一層の理解や楽しさにもつながる．

CHAPTER3：X 線画像で診断することになるが，そのために正常と異常を知ることをダイジェストに書かれている．

CHAPTER4：歯科医師・歯科衛生士が行う手技を磨くためのバックボーンとしての知識が CHAPTER1〜3 の位置付けであれば，それらを踏まえたうえでの注意点が本章に集約されていると言ってよい．

臨床で初めて気づいた理解不十分な知識の再確認を最初から復習するのもよし，チェアサイドにおいて疑問に感じたことを再確認するのもよし．

歯と口腔の基礎と臨床を平易な解説でわかりやすく解説してくれる本書を，チーム医療の実現やより一層の向上を目指すすべての歯科医師・歯科衛生士・歯科技工士に推薦したい．